

開成校新聞

発行 開成中等新聞局
発行責任者 宮崎 清水、北条 桃澤
* * *
東区北22条東21丁目
TEL 788-6987

今年度完全下校なぜ増えた？



▲取材に応じる西村里史副校長

取材に応じる西村里史副校長。今年度完全下校が増えた理由について、先生がフルブリックに基づいて生徒の総合的評価課題が無くなくなった。生徒が真剣に取り組んだ課題を正しく評価したいという考えがあり、時間を確保するために今年度新設した。成績を処理する日であることを生徒に明示する



成績処理日を新設

今年度、「成績処理日」が新設された。成績処理日は先生が生徒の成績を付ける日であり、今年度は9月に5日、2月に3日設定された。この日は生徒が放課後活動を行えず、完全下校となった。成績処理日はなぜ新設されたのか、また授業日数への影響について西村里史副校長に取材した。

「……なぜ今年度成績処理日が新設されたのか
以前から議論されていた。
先生がフルブリックに基づいて生徒の総合的評価課題

が明け、放課後活動が再開されると成績を付ける余裕が無くなった。生徒が真剣に取り組んだ課題を正しく評価したいという考えがあり、時間を確保するために今年度新設した。成績を処理する日であることを生徒に明示する

1/365コマ

4年次生は海外見学旅行で台湾を訪れた。写真は購入したお土産である。現地のコンビニには商品が多くあり、日本に比べてお値段が安い。写真に写っている商品は台湾のコンビニでよく見られる。写真に写っている商品は台湾のコンビニでよく見られる。写真に写っている商品は台湾のコンビニでよく見られる。

ために、成績処理日という名前にした。

「……今年度は9月に成績処理日が5日あったが、5日とした理由は何か

教科によって評価の時期が異なるため、成績処理日を分散させる必要があった。文部科学省で定められた授業時数や行事の日数を踏まえて、何日設定できるのかを計算した結果、5日となった。

「……来年度以降も設定する予定か

来年度も設定する予定。今年度の振り返りを行い、決定する。臨時休校が発生した場合、授業数が減

先生の過重労働が問題に

教員の過重労働問題は深刻な社会問題となっている。

教員の勤務時間は労働基準法に基づいている。労働基準法では勤務時間は1日8時間以内、1週間に40時間以内とされて

ることから余裕を持つ必要がある。そのため日数を増やすのは難しい。今年度と同程度設定するか減らす予定。

「……今年度は午前授業が多数設定されたが、授業日数は足りているのか

授業日数を確認しながら設定しているため、足りている。

「……開成では先生の残業時間を減らすような取り組みを何かしているのか

開成Dayを設定し、残業をしないきっかけを作っている。これにより先生が早く学校を離れるようにしている。

開成Dayの目的とは

開成Dayは毎月22日に設定されている完全下校の日である。西村副校長によると、開成Dayは先生の残業時間を減らすという目的の他に、生徒が放課後の時間をどのように使うのかを自分で考えるきっかけを作るといった目的もあるという。これはプライベートの時間と仕事の時間のバランスである「ワークライフバランス」を考えることにも繋がる。これは社会人にとって大切なことだという。なお、毎月22日であるのは開校記念日が11月22日であることに由来している。

現状だ。実際に文部科学省の令和4年の調査では、中学校教員の13.7%、高校教員の10.3%は時間外勤務時間が「過労死ライン」を上回っていた。過労死ラインとは時間外労働の基準で、月80時間以上を越えると過労死の危険性が高まるとされている。

完全下校 賛否分かれる

今年度は以前と比較して完全下校の日が大きく増え、生徒にも先生にも大きな変化があった。この変化についてどう考えているのか、生徒と先生にそれぞれインタビューを行った。

〈先生〉

インタビューを行った中では賛成、どちらでもないという意見が見られた。賛成の意見は、成績処理がミス無くできる、仕事がか



▲取材に応じる森誠一郎先生



▲質問に答える一年生

どるといふものであった。生徒が学校内にないため、他の先生との情報の伝達の際、生徒に見える、聞こえる心配がないそうだ。完

全下校を増やした理由の一つ、成績処理という目的を達成できていくように。このような意見が多く、反対の意見はなかった。しかし部活動等の顧問をしている先生は、部活動の回数が完全下校によって減ってしまふという影響も同時に感じたようだ。これはやはり試験や成績の処理のためなので仕方がないという声も聞かれた。また、完全下校が増えたことに対して生徒も同様に賛成なのではないかと考えている先生もいた。では、生徒はどのように考えているのだろうか。

〈生徒〉

基礎期、充実期、発展期のそれぞれの生徒へインタビューを行った。取材をした中では賛成、反対、どちらでもないという全ての意見があった。期ごとに比較すると、基礎期が最も反対の割合が大きく、充実期、発展期と進んでいくごとに賛成の人が増えていく傾向にあった。

賛成の理由は家に早く帰宅できるというものであった。一方、反対の人の意見は部活動の回数が減ってしまう、課題ができないというものであった。部活動に行きたい人、大会やコンクールに近い人や、日数が少ない部活動にとっては影響が大きかったようだ。また、情報の課題などの学校以外で取り組むことができ、他の人の意見が欲しかったりする場面で困るといふ。ただ、部活動や放課後ユニットに入っていない生徒は特に変化を感じられず、賛成

アンケート

成績処理日や開成Dayは先生の残業時間を減らす取り組みとして効果的である。しかし、その他の取り組みも必要ではないか。例えば、部活動の地域移行が挙げられる。これは部活動を地域で運営するものであり、文部科学省は休日の部活動の段階的な地域移行を目指している。本校ではバドミントン部が試験的に休日の部活動を地域の運営に移行させた。一方で、部活動は生徒が先生と話しやすい環境を生み出している。そのため、学校は地域移行と同時に生徒が先生に相談しやすい環境をより一層整えるべきである。先生の負担を減らすことは授業の質の向上に繋がるため、この問題は生徒にも関わっている。(4年清水)

「先生の勉強会」 札教研・市立高教研

皆さんは札教研・市立高教研の内容を知っているだろうか。札教研・市立高教研について保健体育科の森誠一郎先生に話を聞いた。

まず札教研は小中学校、市立高教研は高校の先生たちが集まり、互いの学校について話したり、研修をしたり、講師の人の話を聞いたりする、先生のための勉強会のようなものだ。開成は特殊な学び方をしているため、他の学校の先生に影響を受けてもらうことの方が多

いそうだ。札教研・市立高教研によるメリットは、生徒によりよい授業を届けられることだ。他の学校で取り組みを自分の学校に取り入れることで、授業内容に変化が生まれ、生徒も楽し

んで授業を受けることができる。デメリットとしては、完全下校が多くなってしまうことだ。本校は中高一貫校であるため、札教研と市立高教研の両方の日が午前授業・完全下校となる。

でも反対でもないという人もいた。生徒の中でも完全下校に対する認識に差があるようだ。

